

# 甲武相国境地域の中世城郭と築城背景の考察

武藏高等学校2年 田中俊輔

## はじめに

奥多摩および上野原市域の山深い地方は、戦国時代、甲斐、武蔵、相模の国境地帯であった。この地域は戦国大名後北条氏と武田氏の勢力範囲の境界となっており、小規模な戦闘が多発する地域であった。

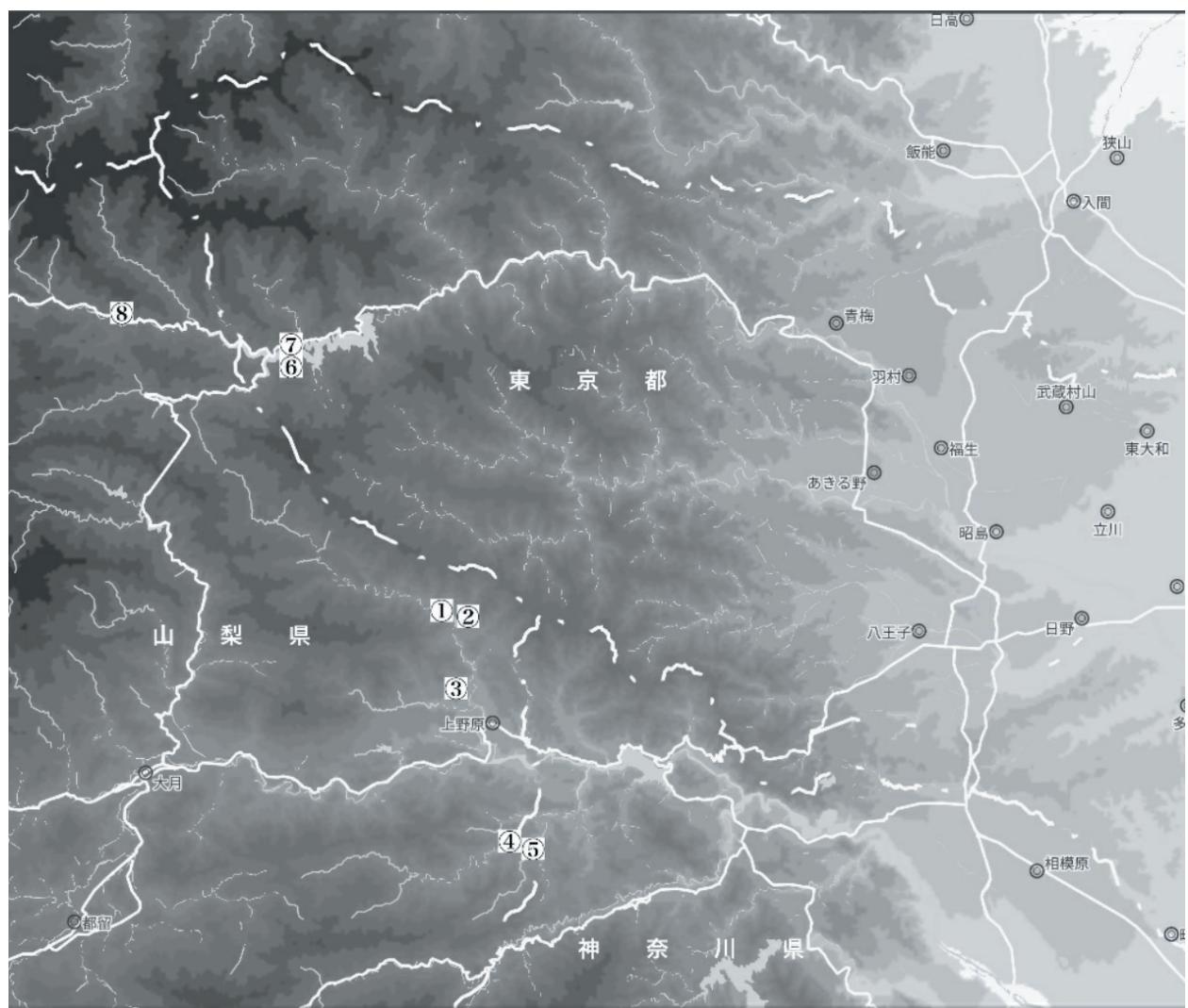
この地域には数か所の城郭伝承地が存在し、それらは各自治体の地誌などでまとめられてきた。上野原町誌、奥多摩町誌、小菅村誌などである。また、これらの城郭をまとめて検討を加えたものとして、中田正光の指摘がある。中田正光は、甲武国境に近い小菅城、川野城山を「村人の城」の性格を持ちながらも、武田氏・後北条氏それぞれの領域支配体制下で番所としての役割を果たしていたと評している。

本論では、上野原市、小菅村、奥多摩町の、国境に近接した城郭をとりあげた（表1・図1）。城郭のうち踏査、図化の必要性があるものを筆者自ら調査し、図化した「縄張図」を資料として使用した。縄張図とは、歩測で城郭の構造を計測し、ケバを用いて書き表したものである。

本論ではこれらの城郭について、文書や伝承からその歴史に検討を加えるとともに、構造を比較することで築城の背景と使用方法を考察する。

### 【図1】本論で扱う城郭の所在地

城郭所在地の番号は表1と対応する。電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した



【表1】本稿で扱う城郭一覧

『東京都の中世城郭』、『甲斐の山城と館』、『神奈川中世城郭図鑑』の記述、図表を参照した。

上野原市				
番号	名称	別名	所在地・伝承地	遺構
1	猪丸城山		譲原	なし
2	小伏城山		小伏	曲輪
3	大倉砦		大倉	堀切、土塁、曲輪
4	一古沢の城ヶ峰		一古沢	曲輪、土塁

相模原市				
番号	名称	別名	所在地・伝承地	遺構
5	奥牧野城		緑区牧野	

奥多摩町				
番号	名称	別名	所在地・伝承地	遺構
6	川野城山		川野（水没）	堀切、曲輪（伝承）
7	杉田館	杉田屋敷	川野（水没）	不明

小菅村				
番号	名称	別名	所在地・伝承地	遺構
8	小菅城	天神山城	川久保	堀切、曲輪

## 凡例

1. 本論に掲載・引用した史料・図・表には、必要に応じて番号とタイトルを付した。  
また、引用したものは、タイトル横に出典を記した。
2. 本論に掲載・引用した縄張図の描法は、本田昇「中世城郭の調査と図面表現」（『中世城郭研究』創刊号、1987年）に準拠している。
3. 本文中で出典を示す際、
  - 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第一－六巻』（東京堂出版、1989－1995年）に収録された史料は『遺文』+文書に振られた号数という形『遺文』～号で本文中に示す。
4. 本文中および註において、敬称を省略させていただいた。

# 第一章 川野城山

最初に触れるのは川野城山である。川野城山はダムの建設によって奥多摩湖の湖底に沈んだ旧小河内村の川野集落に存在が伝承されていた山城で、多摩川に張り出す尾根上にあったとされる。現在、川野城山は奥多摩湖の湖底に沈んでいるが、郷土誌からも、それが遺構を備えたものだったことは明らかである。本論ではこの城跡の地形の復元を試みたい。

## 1. 川野城山の遺構

安藤精一『奥多摩歴史物語』(1993) では、川野城山への詳細な検討が加えられている。川野城山は地元の名主杉田氏の屋敷の向かいの山に位置し、山頂部に約200平方メートルの曲輪があり、どこには2箇所の虎口があったという。また、現地の古老の話として、現在でも奥多摩湖の水位が25メートルほど下がると頂部の曲輪が見えると書いてある。

また、川野城山とともに、土豪杉田氏の館跡についても触れられている。川野城山と杉田氏の関係については後述する。

【図2】川野城山と川野村の位置図

(『奥多摩歴史物語』より引用)

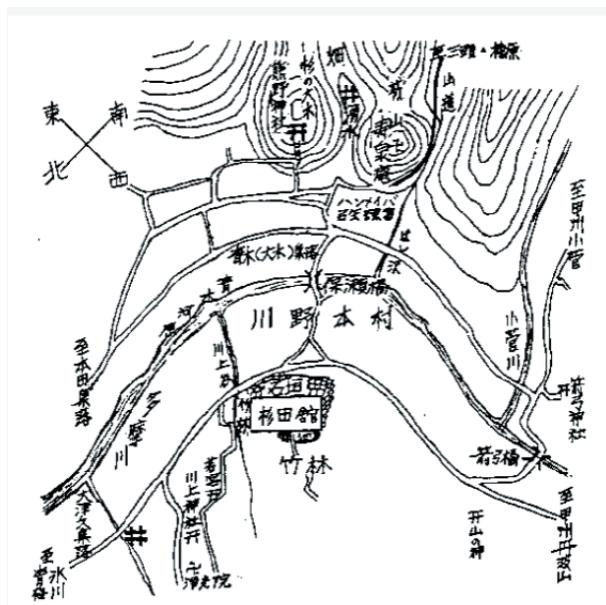


図2では川野城山が川野村に張り出した円錐形の山として描かれている。同書によれば、図中の熊野神社のある平地は2の曲輪と称されていたという。この地図から、杉田館と川野城山の位置関係が分かる（註1）。

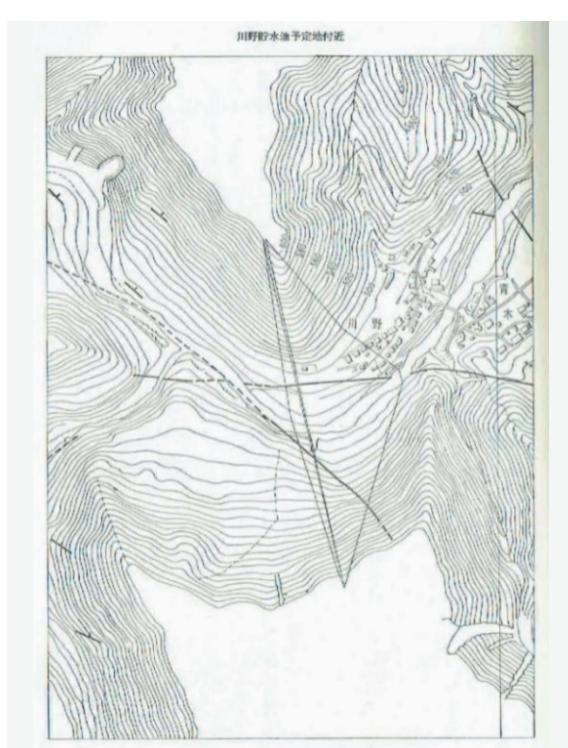
この城郭の所在地であるが、安藤精一の記述に加えて、奥多摩湖愛護会編『湖底の村の記録』所収の水没前の集落図を参照することで特定が可能である。図3は、同書所収の川野集落の概略図である。

【図3】川野城山と川野村の位置図

(『湖底の村の記録』より引用)



【図4】川野集落測量図



【図5】城山と館の位置

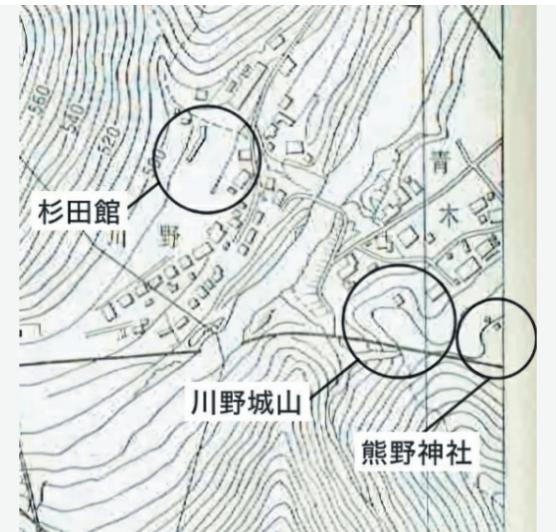
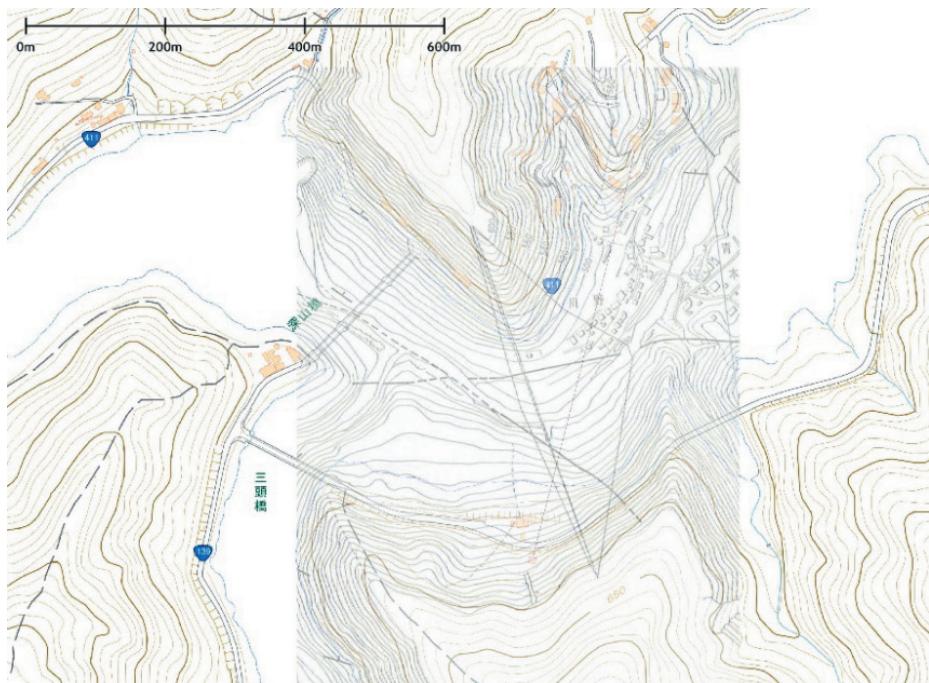


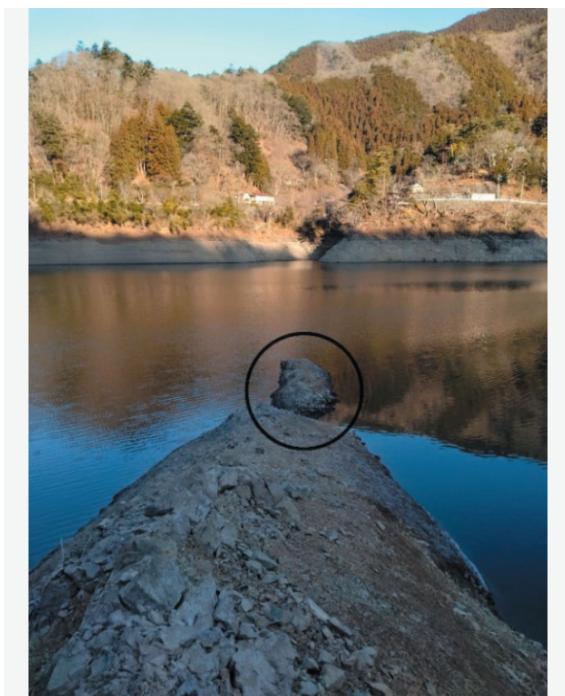
図3左下の「城山」とある部分が川野城山である。また、杉田館の跡地が「運動場」になっていることが分かる。また、『湖底の村の記録』には、小河内ダム建設前に堰堤建設

場所の選定のため東京市が作成した川野集落周辺の地形図が掲載されている（図4・5）。図2、図3と照らし合わせると、図6のような位置関係になることが分かる（註2）。川野城山の地形が分かるという点で、この地図は貴重である。

【図6】地理院地図と図4の比較  
電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した



【図7】湖上に現れた堀切



【図8】堀切と熊野神社跡の平地

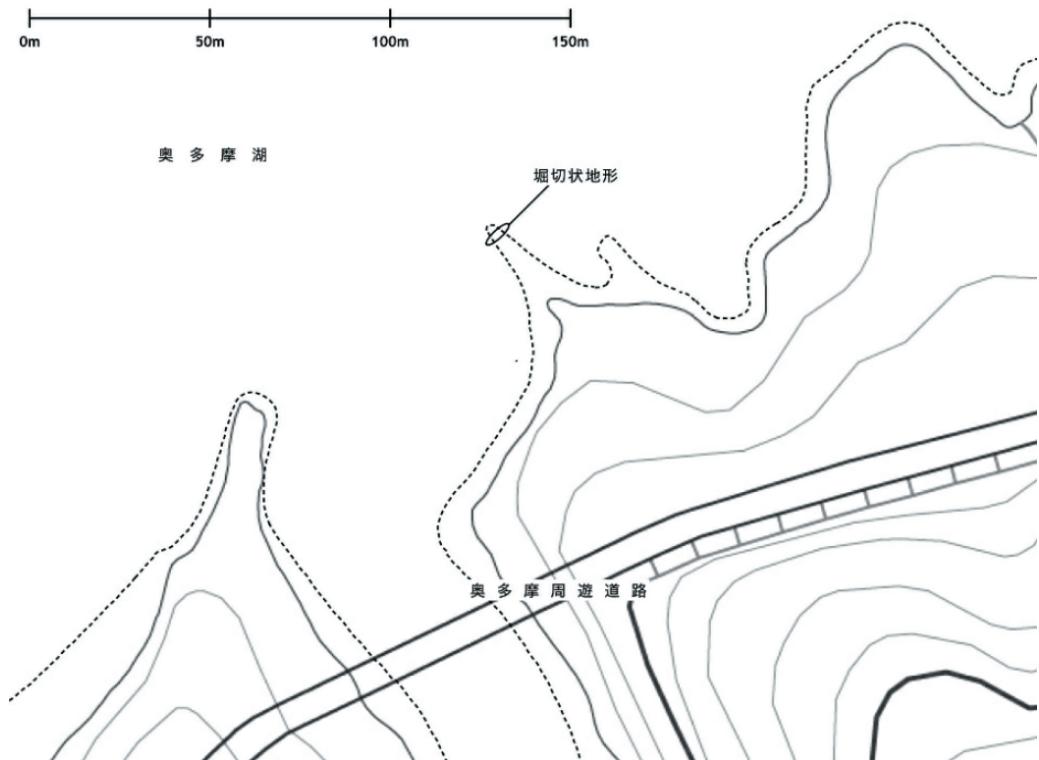


【図9】熊野神社跡の遺構



【図10】堀切の発見地点（点線は調査時の湖岸線である）

電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した



また、筆者が、小河内ダムの貯水率が66.6パーセントと、渴水気味となった日に調査を行ったところ、堀切のような地形が確認できた（図7）。城山の尾根の東隣りの尾根にも、普段水上に姿を現さない平地が出現していた（図8）。平地に石積みが残っていたことから、湖底に沈んだ川野集落の熊野神社の址と考えられる。すなわち、地元で「2の曲輪」と呼称されていた部分である。図2や図3に記載がある「大杉」と思われる切株も確認できた（図9）。調査で確認した堀切状地形は、山の鞍部と考えるには少し不自然な地形である。城の遺構と考えてよいだろう（図10）。

このように、川野城山は、尾根を堀切り、尾根上に曲輪を設けた城だったと考えられる。現地で観察した堀切は細い尾根を遮断する形で設けられていたが、伝承によれば山頂は円錐形であったということであるので、山頂部は筆者調査時には水没したままだったのだろう。

## 2. 川野城山と杉田氏

川野城山の麓には土豪杉田氏の屋敷があった。なお、杉田氏の屋敷は、前述の地図の通り図11の①の地点に比定できるが、『東京都の中世城館』は②の位置に比定しており、これは誤りである。

土豪杉田氏については、『奥多摩町誌』、『奥多摩歴史物語』で仔細に研究されているので詳述しないが、戦国時代前半は青梅の土豪三田氏のもとで小河内の支配にあたり（註3）、三田氏が後北条氏に滅ぼされると後北条氏に従属したようだ。

### 【史料1】北条氏政書状写（『遺文』四二五八号）

態以飛脚申候、抑其以來者、不申承候、何事御座候哉、承度存候、仍我々召仕百姓、連々其口へ總數多取移候、其方憑入候之間、可返給侯、北右（北条親富）へ此分申度候得共、早竟任入候、可然様ニ御取成尤候、恐々饉言、

七月十二日

枕流齋 行韵（北条氏政）（花押）

杉田右近丞殿 御宿所

【史料1】から、杉田氏が北条氏に従属し、国境地帯に勢力を持っていたことが窺える。川野集落に屋敷を構え、周辺を支配していたのだろう。川野城山の位置づけだが、杉田館とセットの要害として維持されたと考えてよいだろう。

## 第二章 小菅城

### 1. 小菅城の地形

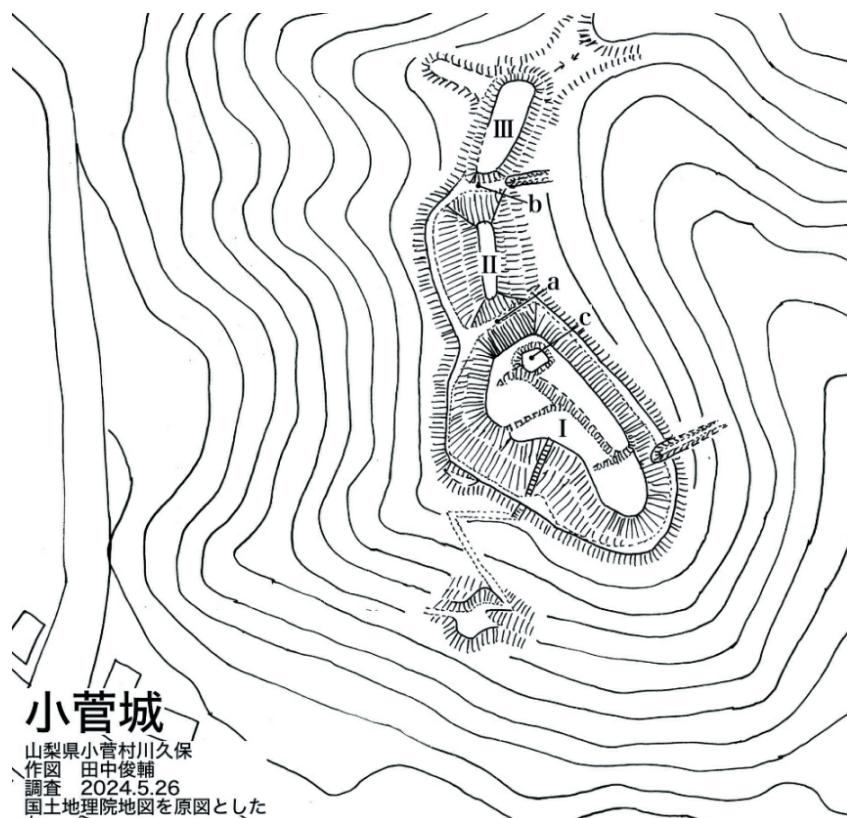
次に紹介するのは小菅天神山城である。旧川野集落が沈む奥多摩湖よりも上流の小菅村中心部の小規模な丘の上に所在する城郭である。

#### 【史料2】『甲斐国志 第5巻』

一小菅遠江守信景城跡 本村川窪矢弓明神、後山ニアリ高半町許城上少シ平カニシテ老松茂レリ西隅ニ天神地神八幡ヲ相殿ニ祭ル小祠アリ後山ヨリ峯ツヽキノ所ニ堀切アリ頂ヨリ貳丈許ノ下ニ山腰ヲ回ラシタル一段ノ平地アリ屏ナト構ヘシ跡ニヤ其南ノ麓ヲ御屋敷ト云四段餘ノ平地ナリ是信景〔筆者註：小菅信景〕居館ノ跡ナリ其前ヲ門口ト云今ハ皆畠トナレリ耕者此地ニ限り肥糞ヲ用キザレトモ西牧ノ頃ハ他畠ト同シク能ク登ルトソ是領主ノ館跡ヲ恐レテ糞土ヲ不入ナリト云

遺構は図11のようになっている。現地を踏査すると、2条の堀切 a、b と曲輪が確認できる。遺構は【史料2】の記述と相違ない。中心の曲輪は小さく、整地されていない。堀切 a に対しては櫓台と考えられる土壇 c がある。曲輪 II は細長く、人の滞在できるスペースはない。このように、小菅城は一時的な戦闘拠点にしかなりえないと考えられる。

【図11】小菅城縄張図



## 2. 小菅城と小菅氏

小菅城は小菅遠江守信景の居城と伝わる。小菅氏は、戦国時代を通じて小菅・丹波地域を支配し、武田氏のもとで国境警備にあたったと考えられている(註4)。小菅氏と杉田氏の関係を示す伝承が『甲斐国志』に掲載されている。

### 【史料3】『甲斐国志 第5巻』

土人ノ傳説ニ何ノ戰ナリシニヤ信景武州川野村ノ内川崎マテ出馬セシカパ杉田入道ト云者ノ箭先ニカヽリテ亡ヒケルトゾ

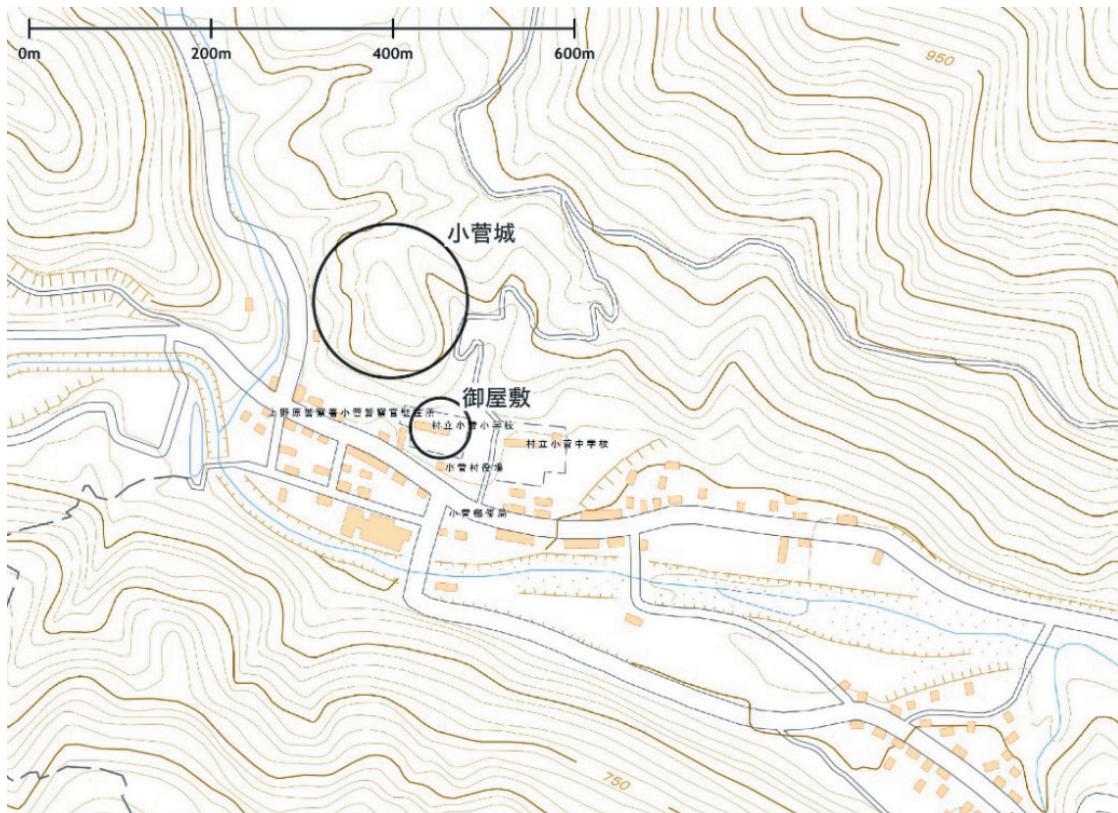
小菅城主小菅信景は川野村の土豪杉田入道の矢に斃れたとある。この伝説の真偽は不明だが、小河内地方と小菅地域の間で紛争があったことは間違いないだろう。その緊張状態のなかで、小菅城が維持されていたと考えるべきだろう。

【史料2】にもみられるように、小菅城山麓には小菅氏の「御屋敷」が存在したようだ。「御屋敷」の場所について、『小菅村誌』では、小菅小学校の近くと推測されている。山下孝司(2016)は、山麓の屋敷地が旧地籍図の50メートル四方の方形地割として確認できるとして、屋敷地と山城が組み合わせになっていると指摘している。

とにかく、小菅城と小菅氏の居館はセットになっていたことは間違いないだろう。

【図12】小菅城と御屋敷の位置

電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した



### 3. 川野城山との共通点

ここまで小菅城の遺構と歴史背景を見てきたが、小菅城と川野城山にはいくつかの共通点が存在する。まず一つは、それぞれの城の立地である。図5および図12を参照すると分かるが、どちらも集落からの比高が50mほどの、集落に突き出した小山に占地している。また、山麓に領主の居館を伴っている。そして、その構造はどちらも山の細尾根を堀り切った小規模なものである。このような特徴から、川野城山と小菅城は、小規模な紛争の多発する国境地帯にあって、領主の居館とセットになった要害として半ば恒久的に維持されたと考えられる。

## 第三章 鶴川上流域の城

山梨県上野原市を流れる鶴川は、甲武国境に並行して流れている。この鶴川に沿って城郭伝承地が点在する。本稿ではうち二ヶ所を取り上げる。

### 1. 猪丸城山

上野原市猪丸に所在する。城山の地名を残すほか、『甲斐国志』に記載がある。

#### 【史料3】『甲斐国志 第5巻』

一城山 猪丸ノ西北ニアリ高壹町許北ハ山足ニ続キ南ハ溪水其裾ヲ繞リ三方ヘ古木立茂リテ上平坦ナリ周回貳町許是亦何人ノ居址タル事ヲ知ラズ土人唯城山ト稱スルノミ瑞光寺所蔵根岸彈正少弼ト云者青一貫文寄附ノ印書アリ是亦何人タル事ヲ不詳恐ラクハ此城主ナドニヤアラナン

城山の伝承が残るのみで、築城者等の伝承は確認できない。山上には平坦地が広がるが、単なる自然地形であり、堀切などの明瞭な遺構は認められない。

### 2. 小伏城山

上野原市小伏に所在する。城山の地名を残すほか、『甲斐国志』に記載がある。

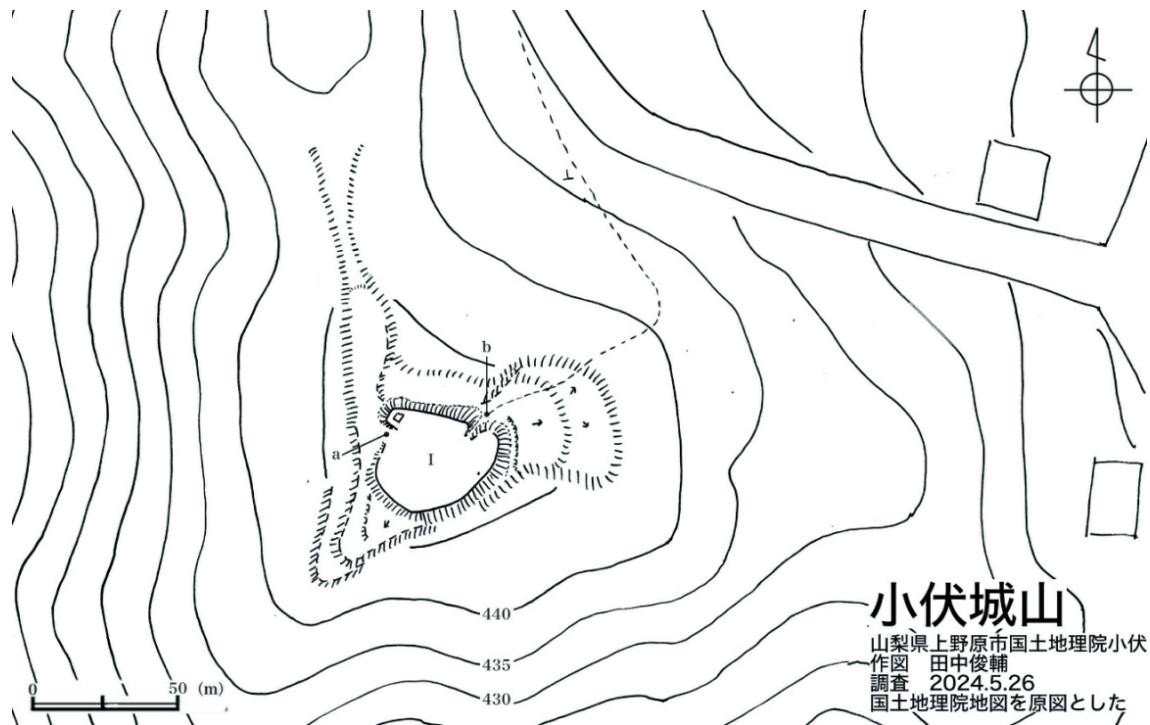
#### 【史料4】『甲斐国志 第5巻』

一城山 虎臥村誕巖寺ノ後ノ山ヲ云上平担ニシテ方四拾間許何人ノ舊跡ニヤ姓名傳ハラズ古瓦ナト折々掘出ス事アリ土人ヘ唯城山トノミ云ノミ永正八年辛未七月照澤藏王種現鰐口銘ニ旦那虎臥ツル坊丸トアリ想フニ此城主タリシ人ノ幼名ナルヘシ

甲斐国志は、虎臥ツル坊丸の居城だと推測しているが根拠薄弱であり、実際は不明である。地元で聞き取りをしたところ、武田氏の烽火台と伝えられているようだ。

縄張は図13のようになっている。山頂部には、明瞭な切岸で囲繞された明確な平坦地Iが存在する。Iには虎口状の部分a、bが存在する。周辺に広がる小規模な削平地は、総じて粗放で、林業の段と見分けがつかない。また、尾根筋に堀切などは見られない。

【図13】小伏城山縄張図

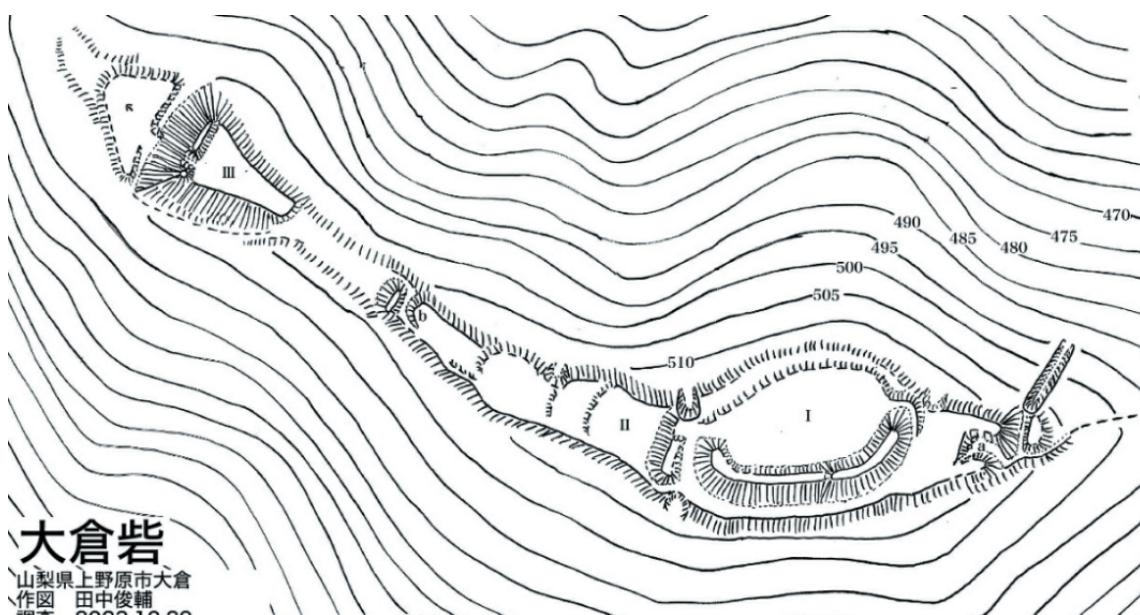


### 3. 二つの城山の共通項

これら2か所の城郭伝承地は、他の鶴川下流域の山城、大倉砦や牧野城と比較すると曲輪取りが大きく、虎口などに工夫がない、著しく粗放な構造である。

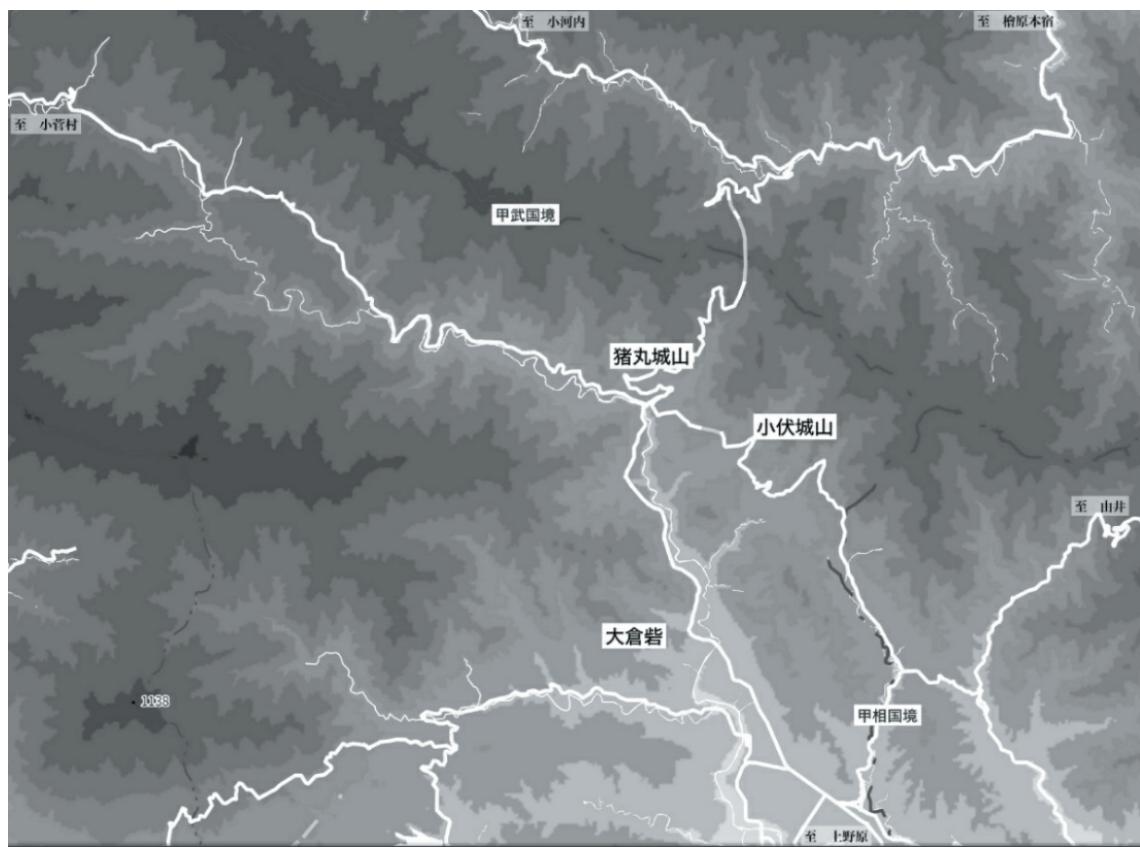
【図14】大倉砦縄張図

a、b地点に舟形虎口を設けるなど、緻密な作りになっている



【図15】3か所の城の位置関係

地理院地図vector（国土地理院）を加工して作成した



また、これらの城郭伝承地には築城者の伝承がないことも特徴である。甲斐国志で城主の推測がなされているもの、明確な伝承は欠いていると言ってよいだろう。では、これらの城郭にどのような歴史的背景があるのだろうか。

この地域は、北条氏と武田氏の勢力圏の境目であったが、大規模な戦闘はなかったようだ。しかし、両軍の小競り合いがあったことは文書から認められる。また、これらの小競り合いのなかで城郭が築かれたことを示唆する史料もある。

#### 【史料5】北条氏政感状（『武州古文書・上』多摩郡一三六号）

御書出

右今度檜原衆、鶴郡讓原へ、相動處、抽粉骨走廻、敵一人討捕候、神妙之至候、仍被成御感狀旨、被仰出者也、仍如件、

辛巳(天正9年) 五月三日

松田四郎右衛門尉

来住野善二郎殿

#### 【史料6】某印判狀(『武州古文書・上』多摩郡一五七号)

五月十五日、於才原〔筆者註:上野原市西原〕敵討捕候、神妙ニ被思召候、仍俵子被下候、向後弥輕身命於走廻者、御恩賞任望可被旨、被仰出者也、仍如件、

庚辰(天正8年)

六月八日

坂本四郎左衛門

#### 【史料7】北条家朱印狀寫(『遺文』二二二六号)

去十七、讓原之内井出小屋打散砌、敵一人討捕候、神妙被思召候、仍御太刀被下者也、卯月十九日

幸田 奉之

小崎彦六とのへ

【史料5】、【史料6】はどちらも現在の上野原市域で起こった戦闘での功績をたたえる文書である。来住野氏はあきる野の在地武士、坂本四郎左衛門は檜原城（註5）主平山氏重の家臣であり、武藏側の武士が甲斐に侵入して戦ったことが分かる。【史料5】に見える「讓原」は小伏城山の所在地であり、城の周辺で紛争があったとわかる。

【史料7】は、そうした武田氏との小競り合いの際に武功を挙げた武士小崎彦六に対する感状である。讓原の「小屋」を攻撃したとある。城郭研究者の松岡進は、「小屋」の性格

について、「小屋」が簡易・小規模な城郭を指す場合があるとした上で、「境目における在地的・民衆的な勢力のよりどころとなっている点に大きな特徴がある」としている。この「譲原之内井出小屋」がどの場所にあたるかは不明だが、桐原地区の城郭伝承地は前に挙げた二つのみであり、そのどちらかである可能性が高い（註6）。

このようなことから、猪丸城山、小伏城山は国境地域の小競り合いのなかで民衆によって一時的に使用された場所だと推測できる。

## 第四章 奥牧野城

山梨県上野原市旧秋山村の牧野集落の対岸、甲相国境からほど近いところに、奥牧野城の伝承地がある。

### 【史料8】『甲斐国志 第5巻』

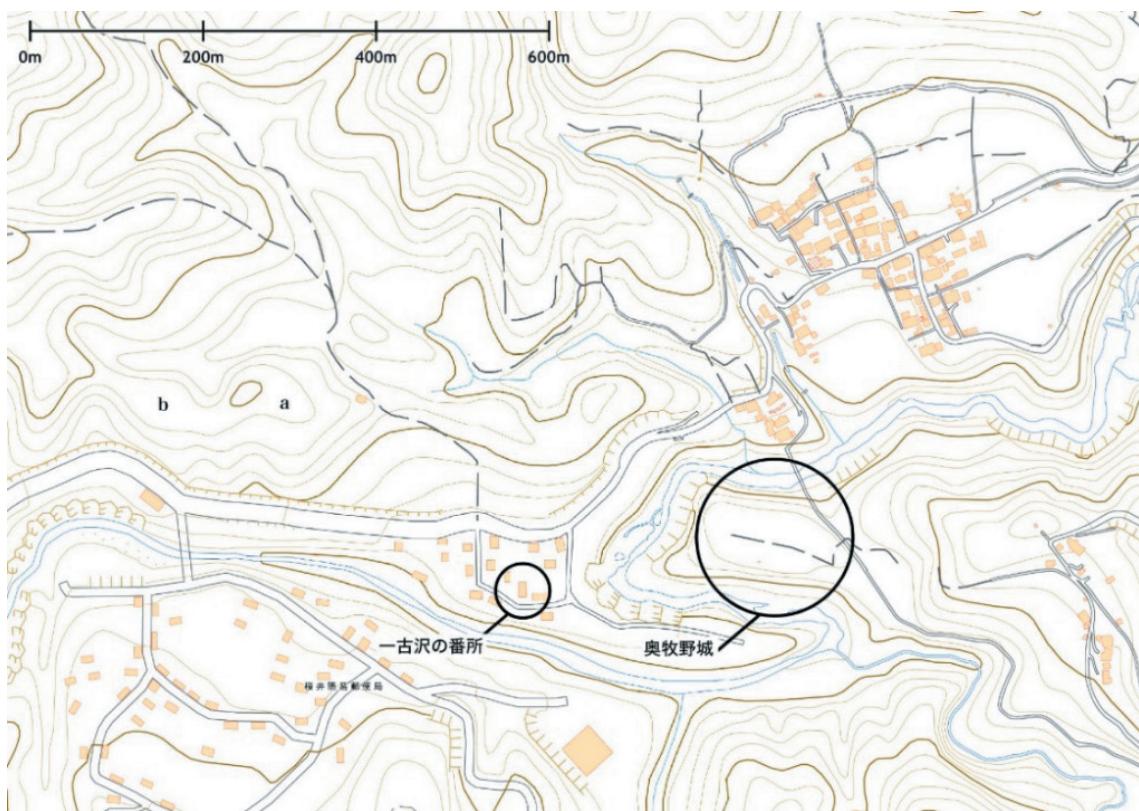
一〔古塚〕 一子澤ノ東犬橋ト云地ニアリ土人相傳フ古亂世ノ時甲相ノ兵此地ニ決戦ノ事アリ戦死ノ者ヲ集メテ一同ニ此地ニ埋メ塚ヲ築キ其上ニ松樹ヲ植エテ其表トスト但シ時代何レノ世ニ當ルヲ不知近世其方ヨリ塚崩レテ矢根或ヘ鎧帷子等出テシ事アリ又塚上ノ草木ヲ採レハ必ス崇アリトテ土人之ヲ畏レテトラズ此東秋山川ノ向岸城跡〔筆者註:奥牧野城〕アリ周回壹町餘堤防今ニ存セリ河東へ相地ナレハ是北條氏ノ城砦ニシテ甲軍ニ備ニ置ケル城ナルヘシ

一〔城ヶ峯〕 一子澤ノ北孤峯聳エシ山ヲ云頂上平坦ノ地ワザト平ケシモノト見ユ蓋シ甲相ノ境ナレハ變事ニ備ヘシ烽火臺ナルヘシ

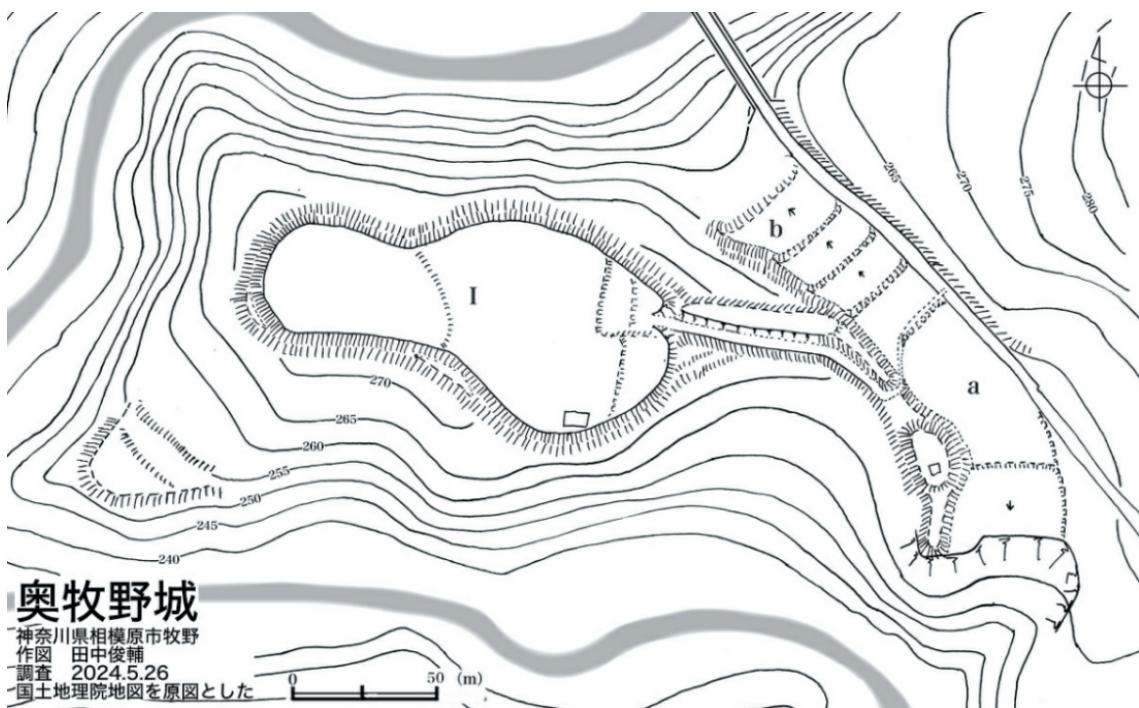
甲斐国志は、奥牧野城の対岸の一古沢で北条氏と武田氏の合戦があったと伝えており、その際に北条氏が奥牧野城を築いたと推測している。ここでも、国境地帯で紛争があったことが伝承から窺える。

【史料8】の通り、一古沢には番所の跡と、城ヶ峰と称される烽火台伝承地がある（図16）。番所跡に遺構は見られない。城ヶ峰と称される部分のうち従来烽火台と言われてきたaの峯は自然地形であるが、bの峯には土壘上の高まりと平坦地が見られ、関連する遺構の可能性がある。

【図16】奥牧野城周辺図  
電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成した



【図17】奥牧野城縄張図



奥牧野城の遺構は図17のようになっている。深い渓谷と天然の堀状地形aによって独立した丘のうえに平坦地が存在する。谷間の段地形bは遺構かどうか不明である。『神奈川中世城郭図鑑』によると、戦前までは土壘が残っていたと伝わる。【史料8】には1町ほどの堤防が残っていたとあるので、Iの縁辺に土壘があったとみるのが妥当だろう。しかし、尾根筋に堀切があった形跡はなく、やはり粗放な構造と言わざるを得ない。

奥牧野城は、国境の最前線にありながら遺構は粗放で伝承も希薄であり、臨時的な城郭であった可能性が高い。

## 第五章 結論:城郭の位置づけと分類

ここまで、国境地帯の城郭を検討してきた。史料や伝承は、これらの地域は戦国時代を通して緊張状態にあったことを支持している。そして、本論で扱った城郭は構造や伝承によって2類型に分けられる。

まず、小菅城、川野城山については、明瞭な堀切などの遺構が確認できる点や、山麓に居館が所在していたという点で、土豪により保持されてきた城郭ということが出来るのではないだろうか。

それに対して、猪丸城山、小伏城山、奥牧野城は、遺構が不明瞭で、伝承を欠く。しかし、城の近くで戦闘が起きていたことは文書から窺えるため、何らかの戦闘に供された蓋然性は高い。すなわち、臨時的な城郭と言って差し支えないだろう。

このように、今回取り上げた5ヶ所の城は一概に国境地帯の城として論じられるものではなく、用途が異なっていたようである。

中田正光（2013）は、川野城山、小菅城を、国境地域の民衆が領主と共に自衛のために築いた城と指摘した。そして、小伏城山や猪丸城山を「民衆の避難所」であると述べている。中田正光の前者と後者の分類は、本論の2類型に対応する。本論では、それぞれの城郭の遺構や立地により多くの検討を加え、この分類を補強することができた。しかし、猪丸城山や小伏城山が民衆の避難所であると結論付けるのはいささか早計であるよう思う。なぜなら、奥牧野城に見られるように、一見粗放な遺構でも後北条氏の軍勢が駐屯したとの伝承が残っているケースがあるからである。しかし、3か所の城は伝承が少なく、遺構が広大で不明瞭な点から、臨時的なものだったということは出来よう。

本論では、甲斐、武藏、相模の国境地域の城郭を、構造と歴史背景から、領主によって恒久的に維持されるものと臨時的なものの2種類に捉えなおした。こうした分類がどのような用途と結びくのかはまだ不明な部分があり、今後の課題としたい。

## 参考文献

1. 杉山博、下山治久 編『戦国遺文 後北条氏編第1－6巻』（東京堂出版、1989－1993年）
2. 萩原龍夫・杉山博 編『新編 武州古文書 上・下』（角川書店、1975年）
3. 間宮士信等原編 蘆田伊人編集校訂 根本誠二補訂『新編武藏風土記稿』（雄山閣、1996年）
4. 奥多摩町誌編纂委員会『奥多摩町誌 歴史編』（奥多摩町、1985）
5. 中田正光『村人の城・戦国大名の城 北条氏照の領国支配と城郭』（洋泉社、2010年）
6. 安藤精一『奥多摩歴史物語』（百水社、1993年）
7. 東京都教育委員会 編『東京都の中世城館』（戎光祥出版、2013年）
8. 山下孝司、平山優 編『甲信越の名城を歩く 山梨編』（吉川弘文館、2016年）
9. 松平定能 編集、佐藤八郎 校訂『甲斐国志 第4巻』（雄山閣、1968年）
10. 松平定能 編集、佐藤八郎 校訂『甲斐国志 第5巻』（雄山閣、1968年）
11. 宮坂武男『縄張図・断面図・鳥瞰図で見る甲斐の山城と館 下（東部・南部編）』（戎光祥出版、2014年）
12. 上野原町誌編纂委員会 編『上野原町誌 上』（上野原町誌刊行委員会、1975年）
13. 小菅村教育委員会 編纂『小菅村誌』（小菅村教育委員会、2022年）
14. 西股総生、松岡進、田嶽貴久美『神奈川中世城郭図鑑』（戎光祥出版、2015年）
15. 奥多摩湖愛護会 編『湖底の村の記録』（奥多摩湖愛護会、1982年）
16. 東京市 編『小河内貯水池郷土小誌』（東京市、1938年）
17. 奥多摩の中世史展：小河内衆杉田氏を中心として、奥多摩郷土資料館、1986年
18. 黒田基樹編『論集戦国大名と国衆 4 武藏三田氏』（岩田書院、2010年）

## 註

1. 『小河内貯水池郷土小誌』は、諸説あるとしながらも杉田氏屋敷を小学校の位置に比定している。
2. 測量図は磁気偏角が考慮されておらず7度傾いている。
3. 『新編武藏風土記稿』には三田氏の当主三田弾正から杉田氏へ宛てた文書の存在が記されており、関係が窺える。
4. 『小菅村誌』を参照。
5. 東京都檜原村本宿に所在。
6. 『上野原町誌』に掲出されている西原の地名の中に「内台」というものがあり「内井出」と読みが近いが関連は不明である。